

きつねの嫁入り(当田町)

むかし、当田の南はずれに、窪田という所があり、そのあたりは一面すすぎが生い茂っていました。

ここは、夜になるときつね火がよく現われ、遠くはなれた民家からもよく見えたということです。五月上がり(田うえの終わったこと)の田んぼに水を入れるころのことでした。

夜なべに、おばばがあしたの子供のおやつにと、いろりにいろいなべをかけて豆をいっていました。

横座(いろりの奥の正面の主人のすわるところ)でおっちゃんは、きざみたばこをきせるにつめながら、

「なあんでむし暑い晩じやる。今夜あたりきつねの嫁入りがあるかも知らんで見てこいや。きつねが出ると、ちようちんの灯のように、ちらち





「見えるでな。」

「どんなやろう。」

娘のどしはちよつとこわい気もしたけれど、や
つぱりきつね火が見たくて、うす暗い玄関の方へ
走りました。かがみ腰で障子の引手の穴からそつ
と外をのぞきました。外はきり雨でかえるの鳴き
声が聞こえるだけで、何にも見えません。

「なあも見えんげの。」

「しばらく待っていよや。今に出るわいや。」

どしは、今か今かと胸をどきどきさせながら、

じいっと外を見ていました。

すると、遠くに一つ二つ灯がぼおうつと見え始
めました。あれがほうやろかと、目をこすりこす
りよく見ると、三つ四つとふえはじめ、ゆらゆら
ゆれながら後になつたり、先になつたりして、こ
ちらへ進んで来るようです。

「あつ見えた。」

「見えたか。ほんならまゆにつばをつけておけや、

きつねに氣付かれたら、だまされるでな。いつまでも見ているでねえぞ。」

と、おっちゃんに注意されました。

としては、あわてて指先で何回もまゆ毛につばをつけました。

「あつ、きつねの行列が見えた見えた。」

と、大きな声でさげびました。

行列の一番先頭の人は、ちようちんを手に、かみしもを着ていますが、よく見ると、太いしっぽが出ています。

つづいてかごに乗った花嫁さん、うつむきかげんで顔はよく見えませんが、綿帽子の下から細い

あごが見えています。

行列は田んぼ道をこちらに向かって、だんだん近づいて来ます。そして、母屋のはさ場の所まで来ました。

「わあー嫁さん来た来た、ほらっ見て見てえ。」

と、としはふり返っておっちゃんを呼びました。



すると、

「いつまでも見ているなって言つたやろ。今にさ
そい込まれてしまふんやほれ。早よこつちへ
来い。」

と強^{つよ}くたしなめられました。としは、おっちゃん
のおきな声^{こゑ}で我^{われ}にかえり、あわてていろいろの所^{ところ}へ
もどりました

としは、本^{ほん}当^{たう}にふしぎ、ふしぎ、こんな面白^{おもしろ}い
こと始^{はじ}めて見^みた、もうしばらく見^みていたらどうな
つたかな? とぼんやり考^{かんが}えていました。

おっちゃんも、おばばも、

「もう寝^ねよや。」

と言^いつただけで、きつねについては何^{なに}も聞^ききませ
んでした。

あんな面白^{おもしろ}いものどうしてかな?

夢^{ゆめ}のような出来事^{できごと}に、としはこつぶんしてなか
な寝^ねつかれませんでした。

昔の当田の地図

